

KEYワード

第
74
回

現代の「五同志」はなにを夢見るか 学問好きは大坂町人の伝統

ノーベル生理学・医学賞の大隅良典先生は、成果がすぐには出ないが基礎研究の重要性を訴え、現代日本社会が、性急に実用性を求め、教育研究の予算さえも削減する傾向にあることに警鐘を鳴らす。確かに現在の大学は、運営予算や期限付きで雇われる研究者の待遇など、ますます落ち着いて教育や研究ができる状況にない。

そうしたなか、大学の歴史に関する展覧会がいくつか開かれている。創立130周年の関西大学は、関西大学博物館と大阪歴史博物館の二会場で「関西大学のちから」と題する展覧会を開催している(11月14日まで)。

また、わたしの大阪大学総合学術博物館(阪急石橋駅下車)では、第20回企画展「**重建懐徳堂開学100周年記念「KAITOKUDO 大阪の誇り—懐徳堂の美と学問—**」が開かれている(12月22日まで、日曜祝日休館)。

「懐徳堂」は、緒方洪庵の「適塾」と並ぶ大阪大学の源流で、享保9(1724)年、儒者の三宅石庵を学主に、尼ヶ崎町一丁目(現・中央区今橋四丁目)に設立された漢学塾である。二年後に將軍吉宗から公認され、官許の学問所となったが、創設は、「五同志」と称される五人の豪商の出資で実現した。運営も商都大坂の実情に応じて合理的精神に貫かれ、規則で「書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事」と定めるなど、身分にこだわらず学べたり、急用があれば講義中でも退出できた。

江戸や京都では考えられない、大坂らしい町人の町人による町人のための学問所である。淀屋橋の日本生命ビル(今橋三丁目)南側に懐徳堂旧跡を伝える石碑が建つ。

教授陣は、五井蘭洲、中井竹山、中井履軒らが教鞭をふるい、門下から草間直方、富永仲基などの優れた町人学者を輩出する。日本文化を研究した海外の研究者に授与される「山片蟠桃賞」(第1回受賞はドナルド・キーン)に名を残す山片蟠桃もそこで学んだ。

明治維新で懐徳堂は閉校となるが、中井家や大阪朝日新聞の主筆・西村天因が政財界に働きかけ、大正5(1916)年に「重建懐徳堂」として再建される。広く人々に門戸を開いた「市民大学」と言われる。昭和20(1945)年の大阪大空襲で、重建懐徳堂は焼失するが、貴重資料約3万6千点は無事で、戦後、大阪大学に寄贈されて「懐徳堂文庫」となる。

このことから大阪大学は、懐徳堂を自校の精神的源流と位置づけ、一般財団法人懐徳堂記念会と協力し、公開講座などの各種事業を展開している。市民や社会と大阪大学を結ぶ拠点・組織として平成20(2008)年に設立された「21世紀懐徳堂」も、その名にちなんで命名されている。



重建懐徳堂の復元模型 大阪大学大学院文学研究科所蔵

重建懐徳堂開学から100年目となる今回の記念展は、漢学塾なので幾分難しい展覧会に思われるかも知れないが、懐徳堂にはめられていた谷文晁の襖絵など美術品も展示される。常設展には、建物の中をコンピュータグラフィックスで再現した「バーチャル懐徳堂」もあって、けっこう面白い、また、所蔵資料は、大阪大学懐徳堂研究センターのホームページ(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)の「WEB懐徳堂」でも公開されており、来館前に調べることができる。

そこで最初の話に戻る。ここ数年、日本からのノーベル賞受賞者が必ずインタビューで訴えるのが、過度の成果主義に傾き、基礎研究をおろそかにする日本の教育・研究現場の現状である。日々の商売で明け暮れる町人たちが、純粋に学問を愛し、自らの資質向上と学問の普及に資力を惜しまなかった懐徳堂の存在を、受賞者たちはどう思うのだろう。実利優先の街としか思われていない大阪にあって懐徳堂の存在は、むしろ現代にこそ、大阪が誇るべきことではなからうか。

追加情報だが、12月11日(日)、大学史を扱ったシンポジウムを梅田のグランフロントのナレッジキャピタルで開催する。ご興味のある方は、大阪大学総合学術博物館のホームページ(<http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>)をぜひ。



淀屋橋の日本生命ビル(今橋三丁目)南側にある懐徳堂旧跡の石碑

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像—」(創元社)など。